能力の自己評価に及ぼすモデルの影響 ——社会的比較過程の2機能¹——

群馬県精神薄弱者更生相談所

高 田 知 恵 子

群 馬 大 学

高 田 利 武

THE INFLUENCE OF MODELS ON THE EVALUATION OF ABILITY: TWO FUNCTIONS OF SOCIAL COMPARISON PROCESSES

CHIEKO TAKATA

*Counseling Center for the Rehabilitation of the Mentally
Retarded Person, Gunma Prefecture*

TOSHITAKE TAKATA

Department of Psychology, Gunma University

A hypothesis derived from social comparison theory was tested through 3 experiments. Ss were required to predict their performance on a novel task after a good or poor model had actually completed it. The experimental situation was varied in the respect of Ss' experience on that task (Exp. I), of the information about Ss' ability (Exp. II), or of the degree of the information enhances or threatens Ss' self-esteem (Exp. III). With no experience or information, Ss predicted higher performance when the model was good than he was poor. But when Ss had experienced the task or received information about abilities, model had no influence. While Ss were influenced only by the good model when the information enhanced their self-esteem, the poor model had strong influence when their self-esteem was threatened.

自己や自己をとりまく環境についての認知の明確さを求める欲求を基底として、社会的脈絡の中での人間行動を説明しようとする Festinger (1954 a, b) の社会的比較過程理論 (theory of social comparison processes) は従来さほど系統的・集約的には研究されていないものの、現在までにある程度の実証データが集積されている (Radloff & Bard, 1966)。しかしそれらの諸知見は、自己と他者を比較しようとする行動は Festinger が述べているような、純粋に自己とその外界についての情報を

得、正確で安定した自己評価をしようとする機能 (自己評価 (self-evaluation) 機能) のみをもつものではないことを明らかにしつつある。Latané (1966) は自己評価機能以外に、自己を補強・高揚せんとして自己を他者と比較しようとする行動の存在を指摘し、これを自己高揚 (self-enhancement) 機能と称している。同様の視点から高田 (1971 a, b, 1974) は社会的影響過程に関する Deutsch & Gerard (1955) の2分類に対応させ、社会的比較過程を情動的なものとして規範的なものと区分して考察することの有効性を示唆している。

情動的な社会的比較過程は Festinger の定式化において本来述べられているように、自己評価欲求の充足機能を有する。すなわち、自・他の関係は Jones & Gerard (1967) のいう情動的依存 (information dependence) 関係にあるといえよう。自分の属性あるいは外界につい

¹ 本稿は第1著者の早稲田大学大学院文学研究科修士論文に基づく。論文作成にあたり御指導くださった早稲田大学文学部・浅井邦二教授、教育学部・橋本仁司教授ならびに実験実施に際し協力された大熊保彦、林春男両氏はじめ早稲田大学心理学教室の学生諸兄に深甚の謝意を表す。

ての不明確さ (uncertainty) が大きく、社会的実在性 (social reality) に依存せざるを得ない時に社会的比較行動が生じるとする Festinger の仮説は、当該属性についての知識の乏しい場合、つまりその属性に関連する事象や課題に対する経験や情報に欠ける場合には情報的な社会的比較が生じることを意味すると考えられる。経験を積むにつれて能力の自己評価が確立される過程を示す Raven & Fishbein (1965) による知見はこの仮説の裏づけとなろうし、成員の集団内での経験の相 (phase) が異なれば情報的な社会的影響と規範的なそれとのいずれが優勢になるかが異なるという橋本 (1971) の報告もこれに関連しよう。更に、経験——時間的経過という縦断的変数を横断的レベルに置きかえたとすれば、当該属性に関する情報の有無として考えられよう。これを支持するものとして、自分の判断の正否に対する客観的情報がない時には他者の判断を知ろうとする行動の増加がみられることを示した高田 (1974) および高田・林 (1975) の報告がある。また、自分の感情・情緒状態 (Gerard & Rabbie, 1961)、意見 (Radloff, 1961)、能力 (Singer & Shockley, 1965) についての情報が欠如している時には対人連合 (affiliation) がより生じやすいという諸知見は、情報探索的な社会的比較行動として従来一般には解釈されている。

一方これに対し、規範的な社会的比較過程は自己補強欲求を充足する機能をもつ。ここでは、他者は単に情報提供の役割をもつだけでなく、自己の強化あるいは支えとして機能していると考えられる。すなわち、自分や他者から望ましいとされている期待の方向にむけて、あるいは望ましくない方向から遠ざかるよう自己を位置づけるべく自己と他者の比較関係を用いようとするものであり²、その意味で自・他の関係は Jones & Gerard (1967) に従えば効果的依存 (effect dependence) 関係にあるといえる。ところで、このような規範的な社会的比較過程には2つの異った形のそれが存在し、またそのいずれが機能するかの決定因の1つとして、比較を行なう個人の自尊の感情 (self-esteem) という変数があるように思われる³。2つの形とは、積極的な方向に作用する自己高揚的比較と、消極的な自己防衛的比較であり、個人をとり囲む状況が self-esteem を高める場合には前者が、逆に

それを脅かすものである時には後者が発動すると考えられる。

自分の意見・性格・能力などの属性に対してそれを積極的に支持し self-esteem を高める情報が与えられ、情報的な社会的比較の必要性が薄らいだ場合でも他者との比較が生じることを示した Gordon (1966)、高田 (1971 a, b, 1974) の知見などは、そうすることにより自我を高揚しようとする積極的比較の例であろう。また、Festinger の理論仮説の中に含まれる、能力比較における向上性の圧力 (unidirectional push upward) の存在を実証し、高能力者との競争——比較の持続——を示した Dreyer (1954) の報告や、比較する対象として自分よりも性格的に優れた者を選択する傾向を示した Wheeler (1966)、Thornton & Arrowood (1966) の知見も自己高揚的比較といえる。

他方、性格的に自分より劣等な者との比較を行なうことにより self-esteem の低下を防ぐ行動を示した Hakmillar (1966) の報告は消極的な自己防衛的比較を典型的に現わした例であろう。自我を脅かす可能性が存在する場合 (Latané & Wheeler, 1966) や、自分の属性を否定的に断ずる情報が与えられた場合 (高田 1971 a, b, 1974) には、社会的比較の停止ないしは抑制が生じることを見出した知見も、そうすることによって自己を防衛しようとする消極的比較の一形態とみなし得る。更にまた、自分とは異なった属性をもつ他者との提携-比較を行なったほうが合理的であるにもかかわらず、他者から拒否される恐れ (Walster & Walster, 1963) や、自分の低能力 (Whitmyre, Diggory, & Cohen, 1961) の故にあえて自分と同様の属性をもつ者との比較を行なったと解釈し得る実験的事例も存在するが、これも同一の文脈の中でとらえることができる。

本研究は従来の諸知見から推論される上述のような考え方を、能力⁴の自己評価に及ぼすモデルの影響という観点から、3つの実験により検討しようとするものである。すなわち、自分にとって全く未知の課題の成績の予測が求められ、更にそこにモデルとなる他者が存在した場合、その課題についての経験・情報の有無によって、また情報が存在した場合それが self-esteem を高揚するか脅かすかによって、そこで生じる社会的比較欲求が情報的機能、あるいは積極的または消極的な規範的機能をもつかは異なり、その結果比較対象としてのモデルの影響の及ぼし方は異なることが考えられる。ある集団成員が他の成員の成績の予測に影響を及ぼす過程を社会的比較過程理論の立場から扱った、これと類似したケースとして、Stotland & Cottrell (1961) の研究がある。しか

² ここでは自・他の比較の結果は、社会的に望ましい、あるいは望ましくないとする期待に沿おうとする目的のために用いられる。“規範的”という本来は集団内における社会的影響の受容過程に関する概念を、自・他を比較しようとする行動に拡大して援用するのはこの故である。

³ self-esteem の概念規定に関して必ずしも一致した定義はないが、ここでは“個人が自分自身に対して置く社会的価値の高低”として考える。

⁴ 実験で扱われるのは特定の課題に対する遂行についての自己評価であるが、ここでは社会的比較過程理論における命題に従い、このように一般化して表現する。

しそこでは社会的比較の情報的機能と規範的機能の区別が不明確であり、必ずしも満足できる結果を示しているとはいえない⁵。本研究ではその点を配慮し、2つの形の社会的比較を別個の実験で扱うことにより、前記仮説に対する明確な検証を試みる。

実験Ⅰ・Ⅱでは情報的な社会的比較を扱い、経験に乏しい場合（実験Ⅰ）や情報に欠ける場合（実験Ⅱ）にはモデルを情報的比較の対象として利用するが、経験・情報が存在すれば利用しなくなるであろうことを検討する。実験Ⅲでは規範的な社会的比較過程を扱う。すなわち、既に情報が与えられ情報的な社会的比較の必要がなくなった状態において、その情報が self-esteem を高めるものであればモデルは積極的な規範的比較の対象としての意味をもち、self-esteem を低下させるものであれば消極的な規範的比較の対象としての意味をもつことを検討する。

実 験 Ⅰ

仮説と概要

実験Ⅰで検討せんとする仮説は前述したように“新奇な課題が与えられ、その課題についての自己の成績を予測する際、当初優勢な情報的機能をもつ社会的比較にモデルは利用されるが、その課題についての経験量が増大し不明確さが減少するとともに情報的比較の必要性は薄らぎ、その意味でのモデルへの依存は少なくなるであろう”というものである。実験では被験者にとってなじみのない課題を2回にわたって与え、その成績を予測させる。その際できるだけ高い成績をあげるように圧力をかける一方、実験群ではモデル1名に実際に課題を遂行せしめその成績を公表する（統制群ではモデルを設けない）。ここでモデルの成績の良い（Good Model：GM）条件と悪い（Poor Model：PM）条件を操作する。第1回目の予測では情報的な社会的比較欲求が優勢であるためモデルに情報的に依存し、高得点への圧力にもかかわらず、モデルのない統制群に比べてGM条件は高く、PM条件は低く成績を予想するであろう。一方、経験を積んだ第2回目の予測ではモデルの良否は影響せず、全条件とも場面全体にかかっている高成績への圧力に従い、高い予測をするであろうことが予想される。

⁵ 彼等は性格特性としての self-esteem の低い者はその高い者に比べて、(1) 不明確さの大きい新奇な場面において、(2) 自分の信念への確信が本来低いため、よりモデルに影響されやすいことを見出しているが、それは情報的比較（経験のない状況で情報を求めるためであって(1)に対応する）と規範的比較（他者と同様に行動することによって信念を補強するためであり(2)に対応する）の二重の意味でモデルに依存しているためであると解釈し得る。

方 法

被験者 某ホテルスクール学生（18—20才）男女41名。このうち2名は実験群でモデルになった者でありデータ分析から除外する。

手続き 実験は実験群では14名⁶、統制群では13名ずつ各々教室で一斉に行なわれる。まず“フラストレーションに耐える能力”を測定すると称し、現代社会生活上この能力は非常に重要であり、これから実施するテストでは高得点をあげることが望ましい旨が強調される。“frustration tolerance test”と銘打たれたこの架空のテストは、標準刺激となる同心円（外円・内円の直径はそれぞれ20, 12mm）1個が上部に、また比較刺激となる同心円1行8個、5行計40個（外円直径は標準刺激と同じで内円は直径12, 9mmのものが20個ずつ散在）が下部に印刷されており、標準円と40個の比較円の異同が1秒間隔に順次テープレコーダーにより読みあげられる。その中に故意に誤って読みあげられるものがあり、それをテープの速さにあわせて順次判定し所定の欄にチェックすることが被験者に課された課題である。“テスト”についての教示が与えられた後、このようにやや複雑な課題であり充分にその手順やテープ録音の速さに慣れる必要があることを口実に、1名の被験者を任意に指名し練習試行1回を行なわしめる。この間被験者はテープ録音を聞くが無論実際にテストを行なうことはせず、またテスト用紙を見ることも許されない。練習終了後まもなく、実験助手により採点された虚偽の結果が公表されるが、GM条件では100点満点で91点、PM条件では27点と伝えられる。これはプリテストにより、統制群の予測得点は50点前後になることが確かめられたために決定された。統制群ではモデルを指名して練習させることはせず、テープを聞くのみとする。ひきつづき実験群ではモデルの成績の良否についての評価が7段階尺度（1—7、以下すべての評定について同様）により求められた後、第1回目の本試行に入るが、その前にどれくらいの成績がとれるかの予測を7段階尺度による評定と100点満点での予測得点により求める。第1試行終了後直ちに第2回目の試行に移るが、ここでもその前に成績の予測を求める。なお、1回目と2回目の“テスト”は比較円の配列の異なった別個のものであるが、プリテストにより実質的な困難度には差のないことが確かめられている。またテープも練習、第1、第2各試行それぞれチェックすべき順位の異なったものが用いられる。最後に実験操作の有効性を確認するためいくつかの質問がなされ実験は終了する。

⁶ このうち1名はモデルに指名される者であり、他の13名と同様に実験終了まで参加するが、前記のとおりのデータは捨てられる。

TABLE 2
Analysis of variance for the data in Table 1

SV	df	Prediction rating		Prediction score	
		MS	F	MS	F
Between subjects	38				
Performance of model (A)	2	4.31	3.56*	4742.09	15.03***
Subjects within groups	36	1.21		315.55	
Within subjects	39				
Trial (B)	1	14.83	41.19***	3243.71	22.76***
A × B	2	0.97	2.69†	610.17	4.28*
B × subjects within groups	36	0.36		142.53	

† $p < .10$ * $p < .05$ *** $p < .005$ TABLE 1
Mean predictions of levels of performance
in each condition

Experimental conditions	Prediction rating†		Prediction score††	
	1st trial	2nd trial	1st trial	2nd trial
Good Model (N=13)	4.23	4.69	75.69	77.69
Control (N=13)	4.15	5.08	56.54	72.69
Poor Model (N=13)	3.23	4.46	39.46	60.00

† The higher the figure, the better the evaluation.

†† A score of 100 is maximum one.

結 果

実験操作の有効性 実験群でのモデルの成績についての評定によれば、GM 条件では PM 条件よりも有意に成績が良いと認知されており（平均値は 7 段階尺度でそれぞれ 6.15, 3.23, $t=8.85$, $df=24$, $p<.001$ ），成績の良いモデルと悪いモデルを作る操作の有効性は確保し得たといえる。また補足質問紙に含まれた“このテストで良い成績を得ることの重要性”に関する評定は、GM, PM, 統制各条件間に有意な差はなく、一致して中間点よりも高い評価であったことから（平均値はそれぞれ 5.15, 5.15, 5.69），実験場面全体に高成績——向上性への圧力をかけんとする意図も有効であったといえる。

成績予測へのモデルの影響 成績を予測する際、モデルが情動的比較の対象として利用されるか否かは経験の量により——すなわち 1 回目と 2 回目の予測とでは異なることが仮説によれば予想される。Table 1 は各条件の第 1 試行と第 2 試行における成績の予測評定と得点を示したものである。またそれぞれの分散分析の結果が

Table 2 である。予測評定においては（モデルの成績）と（試行）の 2 要因間の交互作用が有意（ $p<.10$ ）であることからわかるとおり、第 1 試行では GM 条件・統制群・PM 条件の順に有意に（ $F(2, 36)=4.53$, $p<.05$ ）高くなっているのに対し、第 2 試行では各条件間に有意差はない（ $F(2, 36)=1.42$ ）。また予測得点にも同様の有意の交互作用（ $p<.05$ ）はみられるが、この場合には第 1 試行よりその差は減少しているものの第 2 試行にも条件間の有意差（ $F(2, 36)=4.72$, $p<.05$ ）がある。無論第 1 試行における各条件間の差は高度に有意（ $F(2, 36)=18.64$, $p<.005$ ）である。また（試行）の主効果が有意であり（評定・得点とも $p<.005$ ），一般に第 1 試行より第 2 試行で自分のとるであろう成績を高く予測している。

なお、各条件における実際の成績の差異を、1 試行中に犯した誤答数を指標としてみた場合、第 2 試行において誤答の数は有意に少ないが（ $F(1, 36)=14.11$, $p<.005$ ），各試行内でのモデルの存否・良悪による変動はみられない（GM・PM・統制各条件の平均値はそれぞれ第 1 試行：2.00, 2.38, 2.38；第 2 試行：1.46, 1.00, 1.15）。

考 察

初めて経験する課題についての成績を予測する際、全く客観的な基盤をもたない第 1 試行においては、被験者はモデルに情動的に依存せざるを得ないであろう。モデルを欠く統制群に比べて GM 条件は高く、PM 条件は低く成績を予測しているのは、モデルとのそのような情報的比較を示しているといえる。一方 2 回目の予測に際してはそのような傾向はみられない。これは、既にモデルとの情報的比較を行なうことによって自分の能力の水準についての曖昧さが減少し、更に実際にその能力に関する課題を経験した結果、もはやモデルは能力評価のための情報源としては利用されていないことを示すものとい

えよう。殊に PM 条件では、第 1 試行の予測ではモデルに影響され低い予測をしているのが、第 2 試行ではモデルに関係なく向上性の圧力に従って有意により高く（評定： $F(1, 36)=17.57$ ，得点： $F(1, 36)=19.24$ ，いずれも $p<.005$ ）自分の成績を見積っているのである。モデルの影響が消失するのみならず、第 2 試行では予想の全般的な上昇がみられた。これはモデルのいない統制群でも、第 2 試行で第 1 試行より有意に高い（評定： $F(1, 36)=15.23$ ，得点： $F(1, 36)=11.90$ ，いずれも $p<.005$ ）予測を行なっていることからうかがえるように、向上性の圧力が作用したことにより、また第 1 試行での誤答数には各条件間に差がなく、実際の課題遂行場面での経験は等しいものであったことによりもたらされたといえる。ただし GM 条件では予測評価に試行間の差はみられず（評定： $F(1, 36)=2.46$ ，得点： $F(1, 36)=0.18$ ），その意味で第 2 試行においてもなお良いモデルの影響をうけているとも考え得るが、これについては規範的比較の問題として実験Ⅱ・Ⅲの結果とともに後で再びふれる。ともあれ、第 1 試行の予測ではモデルに影響され、経験を積んだ第 2 試行では、予測得点になお若干の傾向が残るとはいえ、一般にモデルの影響は少ないという結果は仮説を支持するものであるといえる。

実 験 Ⅱ

仮説と概要

実験Ⅰにおいて、情動的な社会的比較の生起の決定因としての役割を確認した経験あるいは時間的経過という縦断の変数を、情報の有無という横断の変数におきかえて検討することが実験Ⅱの目的である。従ってここでは“新奇な課題についての自分の成績を予測する際、それについて何等の情報をも利用し得ない場合には、モデルは情動的機能をもつ社会的比較の対象とされるが、予め情報が与えられている場合には、情動的比較の対象としてのモデルへの依存は少なくなるであろう”という仮説を検討する。実験Ⅰと同様に、被験者が未だ経験したことのない課題の成績に対する予測を行なわせる。ここで被験者の半数にはその課題に関連する被験者自身の能力についての情報を予め与え、残りの半数には与えない。同時に高成績への動機づけを行なうこと、被験者が課題を遂行する前にモデル 1 名に行なわしめその成績を公表すること、その際 GM 条件と PM 条件を操作することは実験Ⅰと同様である。情報のない（No Information：NI）群では実験Ⅰの第 1 試行と全く同様に、情動的な社会的比較の結果 GM 条件は PM 条件よりも成績を高く予測することが期待される。これに対し情報の存在する（Information：I）群では実験Ⅰの第 2 試行と同じくモデルの良否にかかわらず高い予測を行なうことが予想される。なお実験Ⅰで、統制群と比較した場合の実験群

のモデルの影響は明らかなので、実験Ⅱでは統制群を省略する。

方 法

被験者 早稲田大学教育学部 1・2 年度学生 男女 42 名。各実験条件の被験者数は Table 3 に示す。

手続き 前記の如く NI-GM, NI-PM, I-GM, I-PM の 4 実験条件が操作される。実験は各条件毎に 1 セッション 6 名ずつ（被験者は 5 名以下であり、残余はモデルに指名される、あるいは補充のサクラである）行なわれる。被験者は実験室到着後順次 1 名ずつブースに着席する。まず“フラストレーションに耐える能力”を測定するという虚偽の実験目的と、この能力は重要なものであると高得点を得ることが望ましい旨を伝えることは実験Ⅰと同様である。NI 群ではこの後も実験Ⅰと全く同様にモデルによる練習試行、その成績の公表と GM・PM 両条件の操作、成績の予想評価、テスト実施、実験操作の有効性に関する補足質問紙の実施と続く。I 群ではモデルの指名の前に、自己の能力に関する情報を与える操作が含まれる。これは“実験は第 1・第 2 の 2 つの部分から成り、‘第 1 実験’では問題となっている能力を測定する別のテスト（‘テスト 1’と称する）を実施する”と伝えることにより行なわれる。“テスト 1”では EPPS より適宜に選択した質問項目 40 題に、テープレコーダーにより項目が順次読み上げられるのに従って、各ブース内の“‘Yes’”“‘No’”“‘DK’”のいずれかのスイッチを押すことにより回答する。このスイッチはアナライザーに接続されているため回答は自動的に分析・集計されると称し、全回答終了後、ブース内の得点表示ランプの点燈により成績の結果を伝える。無論これは虚偽のものであって、高得点が高能力を示し 100 点満点とされ、20 点きざみになった 1 列 5 個のランプが 6 名分計 30 個パネル上にあるうち、被験者その他の 3 名は中位の 40—60 点を示すランプ、他の 2 名は 61—80 点、21—40 点を示すランプがそれぞれ点燈する⁷。このようにして自己の能力についての情報が伝えられた後、“第 2 実験”として、“テスト 1”と密接に関連したものと称して“テスト 2”すなわち“Frustration tolerance test”が導入される。以下の手続きは NI 群と全く同様であり、最後に実験の真の目的が説明されて終了する。なお実験Ⅱで用いられた“テスト”は基本的には実験Ⅰで用いられたものと同様であるが、外円・内円の直径がそれぞれ 14, 9 mm の標準円と、内円直径が 7.5 mm から 0.5 mm き

⁷ 中位の成績を示したのは、これと全く同様の技法を用い被験者の得点を他者より際だって逸脱したものと伝え、self-esteem を左右するという知見が存在する（斎藤，1970；高田，1971a）ためであり、そのような事態は情動的比較を問題とする実験Ⅱでは望ましくないと考えられる。

TABLE 4
Analysis of variance for the data in Table 3

SV	df	Prediction rating		Prediction score	
		MS	F	MS	F
Performance of model (A)	1	2.95	1.73	8598.06	30.62***
Information (B)	1	2.00	1.17	75.39	<1
A × B	1	2.32	1.36	1079.43	3.84††
Within cell	38	1.71		280.77	
Good Model vs. Poor Model					
Within N.I. condition	1		3.08†		28.08***
I. condition	1		<1		6.38*
Information vs. no information					
Within GM condition	1		<1		1.04
PM condition	1		2.46		3.07†

† $p < .09$ †† $p < .06$ * $p < .05$ *** $p < .005$ TABLE 3
Mean predictions of levels of performance
in each condition

Experimental conditions	Prediction rating†		Prediction score††	
	No information	information	No information	Information
Good Model	4.20 (N=10)	4.17 (N=12)	74.20	66.75
Poor Model	3.20 (N=10)	4.10 (N=10)	35.50	48.30

† The higher the figure, the better the evaluation.

†† A score of 100 is maximum one.

さみに 10.5 mm まで 7 種類ある比較円が 13 あるいは 14 個ずつ 1 行 12 個, 8 行計 96 個散在して構成されたものである。

結 果

実験操作の有効性 I 群, NI 群のいずれにおいても GM 条件では PM 条件でよりも有意にモデルの成績は高く評価されている (平均値は I 群でそれぞれ 6.25, 2.78, NI 群でそれぞれ 6.50, 3.00, 分散分析で (モデルの成績) の主効果は $F(1, 38) = 103.88, p < .005$)。I 群においては補足質問紙で“テスト 1”での自分の成績について評価を求めたところ, 平均値は GM・PM 両条件とも 7 段階尺度のほぼ中間の 3.92, 4.00 であり両者間に有意差はない ($t = 0.10, df = 20$)。更に“テスト 2”で高得点を得ることの重要性についての評価の平均値は I-GM, I-PM, NI-GM, NI-PM 条件でそれぞれ 5.33, 5.90, 5.10, 5.00 であり, 分散分析によれば 4 条件間に有意な差はなく, かついずれも中間点より高い方向の

評価である。これらの諸結果から, モデルの成績に関する実験操作, self-esteem に影響を与えない中程度の成績の情報を与える操作, および向上性の圧力をかける操作はいずれも有効であったと認められる。

成績予測へのモデルの影響 予測評定と得点, その分散分析の結果を Table 3, 4 に示す。NI 群の中で, GM・PM 両条件間で有意に前者は後者より成績を高く予想する——すなわちモデルの影響があらわれている——傾向は予測評定 ($p < .09$), 得点 ($p < .005$) の両者において得られている。他方, I 群では GM・PM 条件間のこのような傾向は予測評定においてはみられない。予測得点においてはなお有意に ($p < .05$) GM 条件の評価は高いが, その傾向は NI 群におけるよりも小さくなっている ((モデルの成績)・(情報) 2 要因間の交互作用は $p < .06$ で有意)。なお, 実際の成績に関しては, 1 試行中の誤答数に各条件間の有意な差はみられなかった。

考 察

成績予測について得られた結果は, 全体として仮説を支持するものといえる。実験 I におけると同様に, 自分の成績の評価に対する何等の客観的基準や経験のない NI 群では, モデルの影響が顕著にあらわれている。これは被験者がモデルと情動的比較を行なっている証左といえよう。ところが, 予測への手がかりを利用し得る I 群では, このようなモデルの影響はみられなく (評定), あるいは小さく (得点) になっており, モデルへの情動的依存の減少がうかがわれる。殊に PM 条件において, NI 群ではモデルと同様な低い予測がみられるのに対し, I 群では向上性の圧力がモデルの情動的影響をしのぎ, より高い予測をしていることも, 予測評定では統計的有意差に達していないものの (得点では $p < .09$ で有意),

実験Ⅰと同様である。

しかしながら、上記の結果には問題点も含まれており仮説支持を明確に断言し得ない。Ⅰ群の予測得点において、GM 条件は PM 条件より有意に高くモデルの影響がみられたことがそれである。これは、利用すべき情報が存在するⅠ群でも、実験Ⅰの第2試行の場合とは異なり、自分の成績予測評価のための最も確実な基準である実際の課題の経験の欠けている故に相対的に情報的比較の必要性が存続する程度が大であったため、予測評定より微細な変動を反映する予測得点においてそれが現われたと考えるのではなからうか。このような事態をもたらした1因として、実験Ⅱで用いられた課題が実験Ⅰのそれに比べて困難なものであったこともあげられる⁸。このような事情のために、モデルの情報的影響が PM 条件での低評価となって現われ、結果の明快さを多少曇らせることになったと考えられる。

実 験 Ⅲ

仮説と概要

実験Ⅲは規範的な社会的比較を問題とし、“ある課題についての自分の成績を予測する時、与えられたそれに関連する情報が、self-esteem を高揚する場合には積極的な規範的社会的比較の対象として、self-esteem を脅かす場合には消極的な規範的社会的比較の対象として、モデルは利用されるであろう”という仮説を検討することを目的とする。実験事態は以下の点を除き実験ⅡのⅠ群と大略同様である。第1に、中性的なものではなく、被験者の self-esteem に抵触するような自分の能力に関する情報を、被験者全員に——半数ずつにそれを高めるもの (High self-esteem : HS 群)、低めるもの (Low self-esteem : LS 群) を与える。第2に、積極的な規範的社会的比較をもたらす向上性への単純な動機づけのみを行なうことはせず、同時に消極的なそれも生起する可能性を作るため、“高得点を得ることも重要である一方、予測と実際の成績との差が大きいことは低能力を示すものである”旨を教示する。HS 群・LS 群のそれぞれにおいて GM・PM 条件を操作することは従前どおりである。

従って、実験ⅡのⅠ群と同じく自分の成績の予測に役立つ情報が既に与えられており、情報的比較の必要性はむしろ少ない。にもかかわらず既に述べたように、この

ような状況下においてもなお他者と自分とを比較しようとする欲求自体——規範的な社会的比較欲求——は生起することが予想される。ここにおいて、受けとった情報が self-esteem を高める HS 群では積極的な規範的社会的比較への傾向が生じ、自分の成績予測に際して良いモデルには影響されるが悪いモデルには影響されないことが予想される。逆に self-esteem を低める情報を受けとった LS 群にあっては、消極的な規範的比較のため良いモデルに影響されず、悪いモデルには影響されることが考えられる。結果として GM・PM 両条件において HS 群の成績予測は高く、LS 群はそれより低く評価する一方、HS・LS 両群内での GM・PM 条件間の評価には差のないことが予想される。

方 法

被験者 早稲田大学教育学部 1・2 年度 学生男女 43 名。各実験条件の被験者数は Table 5 に示す。

手続き HS-GM, HS-PM, LS-GM, LS-PM の4実験条件が操作される。実験手続きは以下の点を除き実験ⅡのⅠ群と全く同様である。すなわち、“テスト 1”の結果が表示される時、HS 群では各被験者とも自分1名だけが 81—100点 の最高得点を示すランプ、他の4名は 41—60 点、残り1名は 21—40 点を示すランプが点燈する。LS 群では被験者1名のみ最低の 0—20 点、他の4名は 41—60 点、1名は 61—80 点を示すランプがそれぞれ点燈する。また“テスト 2”に移る前に、前述した“予測と実際の成績との差は減点の対象となる”旨の教示を行なう。

結 果

実験操作の有効性 GM 条件は PM 条件よりモデルの成績が高く認知される傾向は HS・LS 両群に共通し、その差は有意であって (平均値は HS 群でそれぞれ 6.23, 2.60, LS 群でそれぞれ 6.10, 3.50; 分散分析で (モデルの成績) の主効果は $F(1, 39) = 85.79, p < .005$), モデルの成績についての操作は有効であったと考えられる。

“テスト 1”での自分の成績は GM・PM 両条件を通じて HS 群において LS 群より有意に高く評価されている (各条件における平均値は HS-GM : 6.46, HS-PM : 6.40, LS-GM : 1.60, LS-PM : 1.10, 分散分析で (self-esteem) の主効果は $F(1, 39) = 460.46, p < .005$)。この技法の有効性は従来の研究 (斎藤, 1970; 高田, 1971a) で確認されているが、本研究でも上記の結果から self-esteem についての操作は有効であったといえる。

“テスト 2”で高得点を得ることの重要性についての評価の各条件の平均値はいずれも中間点より高く (HS-GM : 5.15, HS-PM : 5.30, LS-GM : 4.50, LS-PM : 4.60), 分散分析によるとこれらの間に有意差はない。また“予測と実際の成績との差が気になった程度”につ

⁸ 実験Ⅰと実験Ⅱで用いられた課題を、実験群とは別の2群の被験者 (学生) にそれぞれ実施し (各群 $N=10$) 誤答発生率をみたところ、平均値はそれぞれ 5.8%, 19.7% であってこの差は 0.5% 水準で有意 ($F(1, 18) = 74.53$) である。また同時に課題の困難度の評価を求めたところ、平均値はそれぞれ 3.54, 4.70 (数値大: より困難と評価) でありこの差も 0.5% 水準で有意 ($F(1, 18) = 13.09$) である。

TABLE 6
Analysis of variance for the data in Table 5

SV	df	Prediction rating		Prediction score	
		MS	F	MS	F
Performance of model (A)	1	0.84	1.35	3144.26	11.90**
Self-esteem (B)	1	19.90	31.09***	4903.82	18.56**
A × B	1	1.05	1.64	178.71	<1
Within cell	39	0.64		264.23	
Good Model vs. Poor Model					
Within HS condition			<1		3.45†
LS condition			<1		9.13**
High self-esteem vs. low self-esteem					
Within GM condition			9.05**		6.07*
PM condition			23.69***		13.16**

† $p < .07$ * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .005$ TABLE 5
Mean predictions of levels of performance
in each condition

Experimental conditions	Prediction rating†		Prediction score††	
	High self-esteem	Low self-esteem	High self-esteem	Low self-esteem
Good Model	4.85 (N=13)	3.80 (N=10)	73.46	56.00
Poor Model	4.90 (N=10)	3.20 (N=10)	60.30	34.60

† The higher the figure, the better the evaluation.

†† A score of 100 is maximum one.

いての評価が補足質問紙に含まれているが、これについての実験Ⅰ・Ⅱの全体の平均値は4.04 ($N=52$)、実験Ⅲのそれは4.91 ($N=43$)でこの差は5%水準で有意である(数値大：より気になったと評価、 $t=2.56$, $df=93$, なお実験Ⅰ・Ⅱ・Ⅲのいずれにおいても各実験条件間には有意の差はない)。これらの結果から推して、実験Ⅲにおいては積極的な規範的比較を生ぜしめる向上性の圧力が存在する一方、消極的比較へと機能する牽制も作用していたといえる。

成績予測へのモデルの影響 予測評定、予測得点、その分散分析の結果をTable 5, 6に示す。予測評定・得点の両者においてモデルの良否にかかわらず——GM・PM両条件を通じて——HS群の成績予測はLS群よりも有意に高い(それぞれ $p < .005$, $p < .01$)。また、HS・LS各群内におけるモデルの影響をみると、予測評定では

GM・PM両条件間に有意な差はない。しかしながら、予測得点においてはGM条件はPM条件より成績を高く予測する傾向が有意に(HS群： $p < .07$, LS群： $p < .01$)みられる。なお、実際の成績に関しては実験Ⅱと同様に、1試行中の誤答数についての各条件間の系統的かつ有意の差は何等みられなかった。

考 察

予測評定についてみる限り、self-esteemを高揚する情報が与えられたHS群と、それを低下させる情報の与えられたLS群においては、それぞれGM・PM両条件とも成績予測は高い、あるいは低いという形で、積極的な規範的社会的比較の対象として利用された良いモデル、および消極的な規範的社会的比較の対象として利用された悪いモデルの影響が現われており、実験Ⅲにおける仮説は支持されたといえる。ただし、HS-GM条件では予め高成績を予期させるような情報が与えられているため、被験者の予測評定が高いことをもって直ちに良いモデルの影響が大きいことの証左であるとは一概にいいきれない。同様の事情はLS-PM条件での悪いモデルの影響についてもいえる。しかしながら、成績の予測において少なくともHS群では悪いモデル、LS群では良いモデルには影響されていないことは確かであろう。その意味でHS群においては良いモデルの影響量は相対的に大きく、逆にLS群では良いモデルに比べて悪いモデルの影響が大きいと考えられよう。

ところが実験Ⅱにおけると同様に、予測得点の結果には若干の問題が残される。すなわちHS・LS両群において、GM条件での予測はPM条件よりも高く、HS群における悪いモデルとLS群における良いモデルの影響が

現われているとも考えられ、予測評定における前述の解釈と矛盾が生じることである。これは実験Ⅱと同じく、課題遂行の実際体験を欠く状況下において、それが self-esteem を高めるものであれ脅かすものであれ、テストに現われることが予期される能力に関する情報によってだけでは十全に解消しきれずに残る情報の比較の必要性が、より敏感な指標である予測得点に反映されたと解釈可能である。

考 察

自分の成績を予測する際、手がかりとなる経験・情報が欠如している場合には、モデルとの間に情報的な比較が行なわれ、その意味においてモデルの影響が現われることは実験Ⅰの第1試行および実験ⅡのNI群において明瞭に示されている。Festingerによれば、経験や情報が存在し評価への不明確さが減少した時には社会的比較欲求は生じないことが仮定されている。確かに情報的な意味での比較は少なくなるであろう。実験Ⅰの第2試行・実験ⅡのI群で、殊にPM条件におけるモデルの影響が消失あるいは減少していることはその現われといえる。

しかしながら他者との比較それ自体は、規範的な社会的比較という形で、そのような状況下においても依然として行なわれているといえる。つまり、情報提供者としてではなく、自己の補強をはかるための比較対象としてモデルを利用しているのである。自己評価のための一応の判断基準は存在し、情報的な比較の必要性は減じているが、同時に向上性の圧力の強い状況（実験Ⅰの第2試行、実験ⅡのI群）において、良いモデルは依然として被験者の成績予測に影響を及ぼしていることはその証左となろう。この場合、無論良いモデル——高能力者——は、その水準へ自己を近づけ自我の高揚をはかるための積極的な規範的な比較の対象である。このような事態が更に明確化されたのが実験ⅢのHS群であろう。ここにおいても当然情報的な比較の必要性は少ない⁹。更に与えられた情報は self-esteem を高めるものであるため、消極的な比較への牽制が存在するにもかかわらず、向上性の圧力が相対的に強い。従って良いモデルは積極的な規範的な比較の対象とされ、被験者の成績予測に影響を及ぼしているのである。逆に実験ⅢのLS群においては消極的な規範的な比較が生じていると考えられる。この事態においても、情報が与えられることにより情報的な比較への欲求は相対的に減少しているが、その情報は同時に self-esteem の低下をもたらすものである。ために向上性の

圧力よりも消極的な比較への牽制が優勢となり、悪いモデル——劣等な者——は self-esteem の更なる低下を防ごうとする防衛的な比較の対象として利用され、その意味において被験者に影響を与えている。これらを総合してみるに、社会的比較過程の2機能とその生起条件を扱った本研究において検証せんとした仮説は、大要においてその支持が得られたといえよう。

しかしながら、以上の論議を、部分的には得られた結果に則した一推論の域にとどめ、それ故明確な結論を保留せしめるような、今後に残された問題点も2・3存在する。そのような問題の第1には、本実験における情報的・規範的ないずれの社会的比較にしろ、その作用する方向は同一である点があげられる。すなわち、いずれの場合も従属変数は、成績予測に及ぼすモデルの影響——モデルの得点と被験者の予測との近接——なのであり、この点実験結果が若干多義的なものとなっている。第2に、比較がなされる他者との間の類同性 (similarity) の問題がある。Festinger は意見・能力等の属性が類似した者と比較した際に社会的比較欲求は充足されることを仮説したが、Wheeler (1966), Hakmiller (1966) 以来の一連の研究によれば、必ずしもそれは一般的妥当性をもたず、更に社会的比較が情報的・規範的ないずれの機能をもったものであるかによって、比較対象となる他者の属性の類同性も変動する可能性が示唆されている (Latané, 1966; 高田, 1971a, b)。本研究においては、この類同性という変数は統制されていない。殊に実験Ⅲにおいて、モデルと被験者との類同性は、HS-GM, LS-PM 条件で高く、HS-PM, LS-GM 条件において低い。そのような事情が実験結果に混入している可能性は否定できない。第3には、2種の社会的比較欲求の生起条件の問題がある。社会的比較過程理論にあっては、自・他を比較せんとする欲求の発生が基本的仮定であり、その条件分析的検討が最も必要とされるにもかかわらず、本研究も含めて従来の研究の多くは、情報的なものにせよ規範的なものにせよ、社会的比較欲求の作用した結果としての諸行動の検討を通じ、間接的にそれぞれの発生条件を分析している。情報的・規範的なそれぞれの社会的比較欲求の発生条件を、他者と自己とを比較しようとする行動そのものを従属変数として直接的に検討している例は、不十分なものがら高田 (1974), 高田・林 (1975) の報告などがわずかにみられる程度である。

上述の諸問題点を解決し、自・他の比較という社会的行動の最も基本的な分析単位を基盤とする社会的比較過程の理論仮説をより明確なものとするには、更なる実験的検討——例えば、被験者・モデル間の能力の類同性を独立変数とし、情報的なあるいは規範的な社会的比較欲求のいずれかが優勢である場面状況において、そのそれぞれに応じて類同性の高いあるいは低いモデルが及ぼす影

⁹ 実験ⅡのI群も含めて、用いられた課題がやや困難なものであったため、なお若干の情報的な比較が必要とされた可能性が推定され、それ故に予測得点の結果に問題が残ることは前記した。

響の過程を従属変数として分析検討する——が必要とされよう。

要 約

社会的比較過程に含まれる情動的比較と規範的比較——更に後者は積極的比較と消極的比較——の各々の生起と作用を、能力の自己評価に及ぼすモデルの影響の側面から実験的に分析・検討することが本研究の目的である。

被験者（学生）にとって未知の能力を要する課題が予期される場面において、課題の経験の有無（実験Ⅰ）、能力についての情報の有無（実験Ⅱ）、存在する情報が self-esteem を高揚するか脅かすか（実験Ⅲ）、それぞれが異なる状況で、モデルが被験者の成績予測に及ぼす影響をみた。

経験あるいは情報が欠如し、成績の自己評価への不明確さが大きい状況では、モデルの影響は大きく、情動的な社会的比較の対象としてモデルは利用されていると考えられた。情報が存在し不明確さが相対的に低い場合でも、self-esteem が高められる状況下においては積極的に自己を高揚する形で、逆に self-esteem が脅かされる状況下では消極的に自己を防衛する形でモデルの影響は現われ、規範的な社会的比較の対象としてモデルは利用されていると考えられた。

これらの結果に基づき、今後残された若干の問題点が討論された。

引 用 文 献

- Deutsch, M., & Gerard, H. B. 1955 A study of normative and informational social influence upon individual judgement. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **51**, 629—636.
- Dreyer, A. S. 1954 Aspiration behavior as influenced by expectation and group comparison. *Human Relations*, **7**, 175—190.
- Festinger, L. 1954 a A theory of social comparison processes. *Human Relations*, **7**, 117—140.
- Festinger, L. 1954 b Motivations leading to social behavior. In M. R. Jones (Ed.), *Nebraska symposium on motivation*. Lincoln: University of Nebraska Press. Pp. 191—219.
- Gerard, H. B., & Rabbie, J. M. 1961 Fear and social comparison. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **62**, 586—592.
- Gordon, B. F. 1966 Influence and social comparison as motives for affiliation. *Journal of Experimental Social Psychology*, Supplement **1**, 55—65.
- Hakmiller, K. L. 1966 Threat as a determinant of downward comparison. *Journal of Experimental Social Psychology*, Supplement **1**, 32—39.
- 橋本仁司 1971 集団判断作業における成員の同調行動の成因に関する一実験的考察 伊藤安二先生古稀記念論文集編集委員会（編）伊藤安二先生古稀記念論文集：社会心理学の展開とその方向 早稲田大学出版部 Pp. 59—69.
- Jones, E. E., & Gerard, H. B. 1967 *Foundations of social psychology*. New York: John Wiley and Sons.
- Latané, B. 1966 Studies in social comparison: Introduction and overview. *Journal of Experimental Social Psychology*, Supplement **1**, 1—5.
- Latané, B., & Wheeler, L. 1966 Emotionality and reactions to disaster. *Journal of Experimental Social Psychology*, Supplement **1**, 95—102.
- Radloff, R. 1961 Opinion evaluation and affiliation. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **62**, 578—585.
- Radloff, R., & Bard, Leona 1966 A social comparison bibliography. *Journal of Experimental Social Psychology*, Supplement **1**, 111—115.
- Raven, B. H., & Fishbein, M. 1965 Social referents and self-evaluation in examination. *Journal of Social Psychology*, **65**, 89—99.
- 斎藤 勇 1970 2×2 ゲーム・モデルによる自己評価と競争・協同行動の理解 早稲田大学大学院文学研究科紀要, **16**, 115—125.
- Singer, J. E., & Shockley, V. L. 1965 Ability and affiliation. *Journal of Personality and Social Psychology*, **1**, 95—100.
- Stotland, E., & Cottrell, N. B. 1961 Self-esteem, group interaction, and group influence on performance. *Journal of Personality*, **29**, 273—284.
- 高田利武 1971 a 対人連合の決定因としての社会的比較過程の効果 早稲田心理学年報, **3**, 10—16.
- 高田利武 1971 b 恐怖が対人連合に及ぼす効果 年報社会心理学, **12**, 195—209.
- 高田利武 1974 社会的比較過程についての基礎的研究Ⅰ 実験社会心理学研究, **14**, 132—138.
- 高田利武・林 春男 1975 社会的比較過程についての基礎的研究・Ⅱ 日本グループ・ダイナミクス学会第23回大会発表論文集, 46—48.
- Thornton, Dorothy A., & Arrowood, A. J. 1966 Self-evaluation, self-enhancement, and the locus of social comparison. *Journal of Experimental Social Psychology*, Supplement **1**, 40—48.
- Walster, Elaine H., & Walster, B. 1963 Effects of expecting to be liked on choice of associates. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **67**, 402—404.
- Wheeler, L. 1966 Motivation as a determinant of upward comparison. *Journal of Experimental Social Psychology*, Supplement **1**, 27—31.
- Whitmyre, J. W., Diggory, J. C., & Cohen, D. 1961

The effects of liking, perceived ability and value of prize on choice of partners for a competition.
Journal of Abnormal and Social Psychology, 63,

198—200.

——1975. 8. 15. 受稿——

SUMMARY

A series of studies was designed and carried out to test the hypotheses derived from the theory of social comparison processes (Festinger, 1954). The hypotheses tested were that there exists two functions in social comparison processes, i.e., informational and normative ones, and that while comparison with others functions as an informational basis for self-evaluation under the condition of large uncertainty, normative self-enhancing function prevails over informational one in rather less uncertain situation.

Ss were required to predict their performance on a novel task after a model had actually completed it. By an experimental manipulation, the model was perceived either to do well (good model condition) or to do poorly (poor model condition). The experimental situation was varied in the respect of Ss' experience on that task (Experiment I), of the information about Ss' ability (Experiment II), or of the degree the information enhances or threatens Ss' self-esteem (Experiment III). In Experiment I, Ss predicted their performance before (first trial) and after (second trial) they experienced the task actually. In Experiment II, some of Ss received the information about their potential ability on the task (information condition), and some did not (no information condition). In Experiment III, Ss' self-esteem was either

enhanced (high self-esteem condition) or threatened (low self-esteem condition) through the information that their potential ability was either the highest or the lowest of all the participants.

Results of all three experiments support the hypotheses. In the first trial of Experiment I and no information condition of Experiment II, where no experience or information was available, Ss expected to do better on the task in good model condition than in poor model condition. But as in the second trial of Experiment I or in information condition of Experiment II, when Ss had experienced the task or received the information about their ability, model had no effect on Ss' prediction (cf. Table 1 and 3). These results were considered as showing a comparison of the information about the model.

In Experiment III, where Ss' self-esteem enhanced, Ss' prediction was influenced only by the good model (cf. Table 5). Thus self-enhancing comparison with the good model was dominant, which was considered as the positive normative function of social comparison. On the other hand, when the ability information threatened Ss' self-esteem, the poor model had strong influence on Ss' evaluation as a result of the comparison, self-defensiveness of which was regarded as the negative normative function.